室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華の漁業について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2012-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): interview research, Todohokke, fishery, seasonal work 作成者: 橋本, 邦彦, 島田, 武, 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/1008

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華の漁業について

その他（別言語等）のタイトル	The Interview Research: The Once-Upon-A-Time Fishery of the Todohokke Region
著者	橋本　邦彦，島田　武，塩谷　亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	61
ページ	77-88
発行年	2012-03-27
URL	http://hdl.handle.net/10258/1008

室工大紀要第 61 号（2011）77~88

研　究　報　告

椴法華の漁業について

橋本邦彦*、島田武*、塩谷亨*

The Interview Research: The Once-Upon-A-Time Fishery of the Todohokke Region

Kunihiko HASHIMOTO, Takeshi SHIMADA, Toru Shionoya

（原稿受付日　平成２３年５月２５日　　論文受理日　平成２３年１月１９日）

Abstract

This paper deals with three parts of the fishery around 1941 selected from the results of the research interview with an ex-fisher in 2006, September 15, in Todohokke, the eastern region of Hakodate. They account for about 37% of the whole stories which have taken 54 minutes 39 seconds in record. Firstly, we put the recorded data into *kana*-letters as exactly as possible. Secondly, we modified and refined them with the help of a native speaker of the Oshima dialect. Lastly, we added to them the corresponding translation of the common Japanese. The research will give some valuable materials about how the former fishery and the seasonal work to the Northern islands near Russia used to be done before the Pacific War.

Keywords : interview research, Todohokke, fishery, seasonal work

1　はじめに

2000（平成 12）年 7 月に室蘭工業大学 CRD センタープレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成により、同年 9 月 12 日～14 日に第 1 回聞き取り調査を椴法華村（現函館市）で実施した。以来、2001 年、2002 年、2004 年、2005 年、2006 年、2010 年に渡り、合計 10 回の調査が行われている。今回採り上げるのは、その中で、2006 年 9 月 14 日～16 日の第 8 回聞き取り調査資料である。

今回の資料となる聞き取りは、2006 年 9 月 15 日に旧椴法華村（現在、函館市）灯台博物館ピカリン館（現在、函館市灯台資料館と改称）で行われた。被調査者は元漁師の彦野勇氏で、1924（大正 13）年生れ、調査当時は椴法華村に在住していた。調査者は 2 名で、橋本が主にインタビューを、島田が音声記録を、それぞれ担当した。インタビューでは博物館に展示されている昔の椴法華村の様子を写した写真を見ながら、彦野氏が経験した少年時代や漁業に関係する思い出話を自由に語ってもらった。録音時間は全部で 54 分 39 秒（Track1-86）に及ぶが、本稿ではこの内の 37%を占める漁業関連の部分を扱う。

第 2 節では「少年時代の漁業の手伝い」が、第 3 節では「北方領土への出稼ぎ」の様子が語られている。各節には、生の音声を比較的正確にカタカナで文字化したものと、それに対応する標準日本

*ひと文化系領域

語の訳を付した上で、語彙等について若干の注釈を加えた。第4節は結びで、ここで採り上げた第1次資料に基づいた今後の研究の方向性について示唆する。

2　少年時代の漁業の手伝い

この節のトピックは、彦野氏の高等小学校（高等科）時代の漁業の手伝いである。1950（昭和 25）年に大きな被害をもたらした台風15号の写真が契機となり、戦前の高等科生徒の頃の思い出が展開していく。

1 橋本:**ショーワニジューゴネンネ　ショーガッコ**
昭和25年ね。　小学校が
ー　カタムイタッテ　ジューゴゴーダッテ
傾いたって。　15号だって。
タイフージューゴゴーッテ
台風15号って。
2 彦野:**タイフージューゴゴー　ノ**
台風15号　ね。
3 橋本:**ヒドカッタンデスネ**
ひどかったんですね。
4 彦野:**マーツヨカッタ　ツヨカッタトイッタッテ**
まあ強かった。　強かったといったって
ヤッパリアレダモン
やっぱりあれだもん。
5 橋本:**ヨンヒャクジューハッコガヒガイヲウケ**
＜台風15号の写真に記載されたキャプションを読んで＞418戸が被害を受け。
6 彦野**ミンナホラ　ドーロノフチニウチアルベー**
みんなほら　道路の縁に家があるでしょう
アノトーリ
あの通り。
7 橋本:**ウミガ**
海が。
8 彦野:**ウミガ　ゴガンガナイカラ**
海が。　護岸が（して）ないから。
9 橋本:**ウウン　ウミガスグソバニ**
ううん　海がすぐそばに。
10 彦野:**ソレコソー　モトノヤクバノホーサ**
それこそ　元の役場の方に
ミンナヒナンシタカラ　ナントカナニ
みんなが避難したから　何とかできた
シタンダ　コントキワ　ショーガッコー
んだ　この時は。　小学校に
サ　ホレー　ヒナンシタカラ　トージワ
ほれえ　避難したから。　当時は
マダー　イマノチューガッコーッテノネ
まだ　今の中学校というのはなかった
カッタカラノ　ショーガッコーシカネカ
からね。　小学校しかなかったから
ッタカラ　ミンナショーガッコーノホー
みんな小学校の方に
サ　イマデユータイクカンサー
今で言う体育館に。
ケッコーセイトイテアッタカラノー
結構生徒がいたからね。
ンダー　オラーダイタイココノショー
そうだ　私はだいたいここの小学校
ガッコーサアガッテー　ショーガッコー
にあがって　小学校の6年が
ロクネンオワッテ　コートーカニネン
終わって　高等科に2年間
ハイッテーノ　イマノー　ソイコサー
入ってね。　今の　それこさあ
チューガッコーダベナー
中学校だろうな。
11 橋本:**コートーカトショーガッコー　オナジト**
高等科と小学校は　同じ所
コロニアッタノ
にあったの。
12 彦野:**ソーソーソー　コートーカニネンマデサ**
そうそうそう。高等科は2年までさ。
13 橋本:**ニネンネ**
2年ね。
13 彦野:**ンデー　ショーガッコート　ホラ　アッ**
それで　小学校と　ほら（高
タンダー　デー　オレラモ
等科）があったんだ。で　私たちも
オメー　タンニコートーカサハイッタン
あなた　単に高等科に入っただけでね。
ダケデノー　ナンモイカネンダ　イクシ
全く行かないんだ。行く暇
マネーンダ　カセガネバネーンダモン
がないんだ。（お金を）稼がなければなら
ハタラナカネバネーンダ
ないんだもの。働かなければならないん
モン
だもの。
14 橋本:**コドモモハタラカナケレバ**
子供も働かなければ。
15 彦野:**クワレネーンダモンナ**
食べることができないんだもんな。
16 島田:**コートーカヘハイッタトキッテ　イクツ**
高等科へ入った時って　いくつ
ダッタンデスカトシワ　コートーカヘハ
だったんですか歳は。　高等科へ
イッタトキワ　ナンサイダッタンデスカ
入った時は　何歳だったんですか。
17 彦野:**コートーカハイッタトキワ　オラントキ**
高等科に入った時は　私の時は
ワー　ソイコサー　ハッサイデネーバー
それこさあ　8歳でなければ
ショーガッコーイチネンセイデネーンダ
小学校の1年生になれないんだもん。

モン　ダカラ　イマデーロクサイデ　ノ
だから　今みたいに6歳で　ね
ショーガッコーサ　ハイネーンダカラ
小学校には　入らないんだから。
ハッサイナッテー　ハジメテショーガッ
8歳になって　初めて小学校
コーイチネンナルンダカラ　ショーガッ
1年生になるんだから　小学校
コーロクネンスギルベ
6年過ぎるでしょう。
18 島田:アッ　ロクネンデスカ
あっ　6年ですか。
19 彦野:ショーガッコーワ　ロクネンナンダ
小学校は　6年なんだ。
20 橋本:アトニネン
あと2年。
21 彦野:ロクネンオワッテー　ソーヤッテ　コー
6年が終わって　そうやって　高等
トーカサハイルシトワ　ハイルノセ
科に入る人は　入るわけだ。
ゼンゼンハインナイシトワ　モーホトン
全然入らない人は　もうほとん
ドハイネンダー
ど入らないんだ。
22 橋本:ショーガッコーデオワッチャウンデスネ
小学校で終わっちゃうんですね。
23 彦野:ソーソー
そうそう。
24 橋本:マタ　シゴトスル
また　仕事をする。
25 彦野:ハイリテーヤツワ　ソコサイマサーナン
入りたい人は　それこそ（お金が）
ボカタリナカッタンダベナ
いくらか足りなかったんでしょうね。
タリネーシトッテネーンダケドモ
出して出せないわけではないんだけれど
ゴエンデモジューエンデモ　ダサネバ
5円でも10円でも　出さなけれ
ナンネーンダケドサー　ソーヤッテ
ばならないのだけれどもね。そうやって
ハイルルシトワハイッタンダ
入る人は入ったんだ。
26 橋本:アレ　ナンノシゴト　ギョギョーデスカ
あれ　何の仕事。　漁業ですか。
ヤッパリ　オテツダイシタッテユーノワ
やっぱり　お手伝いしたっていうのは。
27 彦野:ソノトージワ　サー　イマノコーコラエ
その当時は　ねえ　今のここいらへ
イクトチュー　アノー　ホラー　ウチ
行く途中に　あのう　ほら　家が
ナンモネクナッテ　マンナカニポツント
何もなくなって　真ん中にぽつんと
イッケンアルベー
1軒あるでしょう。
28 橋本:ウンウン　コッチガワ
うんうん　こっち側。
29 彦野:ヤマノホーニ　モーアノ　ソレコソ
山の方に　もうあの　それこそ
ダレモシトハイッテネー　モーミンナ
誰も人の住んでいない　もうみんな
ナンジューネンモタツンダカラー　アノ
何十年も経つんだから。　あの
シタノホーニ　ウミワーガッコーノ
下の方に　海は学校の
ウエーアッタンダー　ガッコーノ　ソイ
上にあったんだ。　学校の　それ
コサー　カンカツダッタンダ　ダカラ
こさあ　管轄だったんだ。　だから
ホカノシトワ　ナンボコンブアッタテー
他の人は　いくら昆布があっても
トレニイカレネーシ　トレネカッターシ
採りに行かれないし　採れなかったし。
30 橋本:トッチャイケナイノネー
採っちゃいけないのねえ。
31 彦野:ガッコーノ　ホラ　コートカノスイサン
学校の　ほら　高等科の水産課
カデ　ソイコサ　コンブトッテー　ハマ
で　それこさ　昆布を採って　浜に
サホシテー　ノ
干して　ね。
32 橋本:コートカニ　スイサンカッテアッタンデ
高等科に　水産科ってあったんですね。
スネ
33 彦野:ソーソー　ソノアタリカラ　スイサンカ
そうそう　その当たりから　水産科って
ッテノワ　アッタンダー
いうのは　あったんだ。
34 橋本:セートタチガ　ソノコンブヲトッテー
生徒たちが　その昆布を採って。
35 彦野:ソーソー　オイラコンブトッテ　ホシ
そうそう　私たちは昆布を採って　干し
タノサー　ソイコサー　テーツィッコ
たのさあ。それこさあ　手を突っ込んで
ンデ　ウニトッタリサー　ノ　ウニ
ウニを獲ったりさあ　ね。ウニを
トルノ　カッテニクーノニトルンダケド
獲るのは勝手に食べるのに獲るんだけど
ノ　ホラ　ソレコサ　ガッコーノシキチ
ね。ほら　それこさ　学校の敷地だから
ダカラ　クイキダカラ　ムラノシトワ
区域だから　村の人は
ゼッタイハインネンダー　モノトルニ
絶対に入らないのさ。　物を獲るのに
ハイネンダー
入らないんだ。

36 橋本:ジャー　ソコデトッタコンブヲ　ウッタ
じゃあ　そこで採った昆布を　売ったり
リシタノワ　ガッコーノオカネナノ
したのは　学校のお金（のため）なの。
37 彦野:ソーソー　ソレヲトッテ　カワカシテ
そうそう　それを取って　乾かして
クミアイサーシュッカシテ　ソノカネヲ
組合に出荷して　その金を
ホレ　コッタカラ[1)]　オサメルワケ
ほれ　＜不明＞　収めるわけです。
38 橋本:アーナルホド
あーなるほど。
39 彦野:ネバー　ナンモヤラレネーノセ
そうでなければ　何もできないのさ。
カネネーンダモノ
お金がないものだから。
40 橋本:ソーヤッテ　オカネネ
そうやって　お金ね。
41 彦野:ダカラ　ソレデ　コンブトッテーホシテ
だから　それで　昆布を採って干して
クミアイサーシュッカシテ　デ　ソノモ
組合に出荷して　で　そのも
ラッタチンギンワ　ソッカラ　ソノー
らった賃金は　それから　そのう
コートーカサオサメテー　イマコンダー
高等科に収めて　いま今度は
ソイコサー　ガッコーデ　アレカッタト
それこさあ　学校で　あれを買った
カコレカッタトカ　ノー　シツヨー
とかこれを買ったとか　ねえ　必要な
ナモノカッテ　ホラ　アレシタベヤ
物を買って　ほら　あれをしたでしょ。
ソイデー　ガッコーアルンダカラ　ソイ
それで　学校があるんだから　それ
サ　トージサマダー　ソイコサー　ミウ
で　当時はまだ　それこさあ　三浦
ラサンノトルアミガ　タイシタアッタモ
さんの所に獲る網が　たくさんあったも
ンダンダー　ショッチュー　チョーシサ
のなんだ。　しょっちゅう　銚子に行く
イクトチューデ　イマノソッチホーニ
途中で　今のそっちの方に
アッターカワムラリョカンッテナ　アソ
あった川村旅館っていうね　あそ
コノオヤジワ　ソイコサー　アミヤッテ
この親爺は　それこさあ　網で魚を獲
タシ　ソイコサー　ムコサイケバー
っていたし　それこさあ向こうへいけば
アレダ　カワグチッテユー
あれだ　川口っていう
ジューボシカワグチッテノー
十星川口＜屋号＞ってねえ
デーケークヤッテンダ　シトタノンデ
大規模にやってんだ。　人に頼んで
ホラ　ハタラキニクルシトヤトッテー
ほら　働きに来る人を雇って
デ　ソシテ　イワシトッテー　イワシ
で　そして　鰯を獲って　鰯を
トレバー　イマミタイニ　ノー　ナマ
獲れば　今みたいに　ねえ　生で
デサー　ソッチャヤルコッチャヤルンデ
ねえ　仕事を分業でやるのではないの
ワネーンダカラ　ゼンブジブンデ
だから。　全部自分で
ソイコサー　ゴエモンガマデノー
それこさあ　五右衛門釜でねえ
タイテー
ゆでて。
42 橋本:タイテネ
ゆでてね。
43 彦野:ホイデー　ソイコサー　アーユーマルイ
そして　それこさあ　あのような丸いの
ノー　マンナカニ　コー　ミズアッタシ
を　真ん中に　こう　水があったし
コーアッテー　デ　ソイコサー
こんな風にあって　で　それこさあ
ワレワレ　ソノー　ダラダラスルカラ
私たちは　そのう　（水が）垂れるから
ドードーッテユッタモンダケドノー
「どうどう」って言ったもんだけどねえ。
44 橋本:ドードー　ドードー　フーン
どうどう。　どうどう　ふうん。
45 彦野:ソイサー　オサエテテー　ソノカマカラ
それで　押さえていて　その釜から
46 橋本:アゲテー
上げて
47 彦野:アゲテー　ソイコサー　アゲテーシメテ
上げて　それこさあ　上げて締めて
マタカ？　ネバナラネーベサー
また＜不明＞ねければならないでしょう。
デ　コンドー　ソレワージャッキデ
で　今度は　それはジャッキで
シメルンダ
締めるんだ。
48 橋本:シメル
締める。
49 彦野:ジャッキツイデ　ノ　ソイコサ
ジャッキをつないで　ね　それこさ
シメテ　セバー　ミズミナキレテ
締めて　そうすると　水がみんな切れ
シマウベサー　アブラクムシトワ
しまうでしょう。油を汲む人は
コンドワソノアブラクンデー　ソノ
今度はその油を汲んで　その

ドーサニシメテー　ソイデ　ミジケ
「どう」で締めて　それで　水気が
ネークネレバ　コンドワー　ソノジャッ
なくなれば　今度は　そのジャッ
キユルメテノ　フタツ　コー
キを緩めてね　２つ　こんな風に
マルイモンダンダケド　マルイモンデ
丸いものなのだけれど　丸いもので
ウエーネーンダケド　ノ　マンナカデ
上の部分がないのだけれど　真ん中で
コーホラ　アワセテトメルヨーニデキテ
こうほら　合わせて止めるようにできて
ルンダ　デキテアッタンダ　ソレヒラ
いるんだ。できていたんだ。　それを開
イテー　コンドワ　ソノシボッターイワ
いて　今度は　その絞った鰯を
シヲ　コンダー　ホラ　ムシロサイレテ
今度は　ほら　ムシロに入れて。

50 橋本:イレテネー　ウン
入れてねえ　うん。

51 彦野:ホスネーネバネーデ　ソレデコ
干さなければならないんで　それで
ンドワ　ダカラソレ　コートーカニイタ
今度は　だからそれ　高等科にいたから
ダッテ　イワシダイリョータッテバ
といっても　鰯が大漁だといえば
ダイリョーバタアゲテ　ヘバ
大漁旗を揚げて　そうすれば
ガッコーナンテ　カンケーネーンダ
学校なんて　関係ないんだ。
ユケバー
（漁に）行けば。

上記の彦野氏の語りには２つの興味深い点がある。一つは、学校管轄の浜があって、ここには村人は入ることが許されず、専ら、高等科の生徒らが昆布採り（あるいはウニ採り）をして、備品代を賄っていたことである。もう一つは、漁の後の鰯の加工の様子である。鰯を五右衛門釜でゆでた後に水分を取るのに「どう」または「どうどう」と呼ばれる道具が用いられていたことが語られている。さらに、鰯から油を取る様子やその絞りかす（これは魚肥として使われた）を作る様子などが語られている。

３　北方領土への出稼ぎ

この節では現在北方領土と称されている国後島、択捉島、及び北千島や樺太方面で戦前に展開されていた出稼ぎ漁業の思い出を扱う。彦野氏のインタビューでは Track16~26 と Track56~79 の 2 つの部分に相当する。

３．１　漁船のことなど (Track16~26)

1 彦野:ソノコロワ　ジューロクネンノ　ショーワ
その頃は　16 年かな。　昭和
ジューロクネンノネ　ショーワジューロク
16 年のね　昭和 16 年の
ネンノゴガツカナ　ココカラ　デカセギニ
5 月かな。　ここから　出稼ぎに
デタンダカラ
出たんだから。

2 橋本:アー　デカセギニイッタノワ　ソノコロ
ああ　出稼ぎに行ったのは　その頃
ジューロク
16.

3 島田:ロクネン　フーン
6 年。　ふーん。

4 橋本:アー　ソーデスカ
ああ　そうですか。

5 彦野:ヨーヤク　ソイコサ　シトリデイケバー
ようやく　それこさ　一人で行けば
アイダー　ナーニモデキル　アレダッタ
あれだ　何でもできる　あれだった
カラー
から。

6 島田:ハイ
はい。

7 彦野:ソノコロ　ミンナデ　ヨーヤク　アイダ
その頃　みんなで　ようやく　あれだ
ミンナ　ソイコサ　オレワー　ホラ
みんな　それこさ　私は　ほら
ナンダカンダアッテー　ナニキカイ　ホラ
色々なことがあって　何の機械　ほら
エンジンチョーシガ？　ダッタカラ
エンジンの調子が＜不明＞だったから
ダカラ　エンジンノチョーシノ　ホラー
だから　エンジンの調子がね。　ほら
ハー　ソイデ　キタナイコトナンダ
はあ　それで　手が汚れることなんだ。
ダケドモ　ソレガスキナモンダカラサー
だけども　それが大好きなものだからねえ。
エンジンノチョーシガノー　ダカラ　ムカ
エンジンの調子がねえ。　だから　昔の
シノ　オマエ　イマミタイニ　デラルバッ
あなた　今みたいに　すぐかかる
カリダカラ　ノ　ソーセバ　エンジンカ
んだから　ね。そうすれば　エンジンが
カッテ　ハッシャスルダッテ　トージワ
かかって　発車するといったって　当時は
ソーデネーンダ
そんなわけにはいかないんだ。
ヤキダマダカラー　バーナーデヤキダマフ
焼玉だから　バーナーで焼玉をふか
カシテ
して。

8 橋本:フカシテ
ふかして。
9 彦野:ソシテー　アカグナレバー　アカグナルマ
そして　赤くなれば　赤くなるまで
デ　ホラ　フカスンダ
ほら　ふかすんだ。
10 島田・橋本:ハイ
はい。
11 彦野:デ　ソイデ　フカシテ　コンダー　ウエ
で　それで　ふかして　今度は　上か
カラ　ノズルデー　アブラデテイグー
ら　ノズルで　油が出ていく。
ノズルツッコンデー　シメデー
ノズルを突っ込んで　締めて。
12 橋本:アー　テマカカンネー
ああ　手間がかかるねえ。
13 彦野:ソイデ　ホレ　ソレコサ　コンドツカマ
それで　ほれ　それこさ　今度つかまえ
デ　ホラ　コーヤッテ　フッテー　ボン
て　ほら　こうやって　振って　ぼん
トカカレバー　ハナシテ　カカルマデ
とかかれば　離して　かかるまで
フッテヨルンダーナ　ソーヤッテ
振っているんだな。　そうやって
ヤッタモンダー　サー
やったもんだあ　さあ。
14 島田:ヤキダマデスカ
焼玉ですか。
15 彦野:ソーソー
そうそう。
16 島田:テツデスカ　テツカナー
鉄ですか。鉄かなあ。
17 彦野:ダカラ　トージワノー　イマナラー
だから　当時はねえ　今なら
ドーモナンネーダッテ　トージワ
どうしようもないんだから。当時は
バリキニスレバノー　ゴバリキ
馬力にすれなねえ　5 馬力。
ゴバリキナンデスヨ　ヤキダマダカラ
5 馬力なんですよ。　焼玉だから
ノー　ホンデー　ソレコサー　オレ
ねえ。それで　それこさあ　私は
ゴガツカラ　ココカライッタンダカラ
5 月から　ここから行ったんだから。
ゴガツカライッテー　エトロフダトカサ
5 月から行って　択捉だとかさ
ノ　キタチシマダトカ　ムコーサバッカ
ね　北千島だとか　向こうにばかり
リイッタンダー
出かけて行ったんだあ。
18 橋本:ケイロワネ　ドーイキマシタ　ニホンカ
経路はね　どう行きました。日本海を
イトーッテイッタンデスカ　ソレトモ
通って行ったんですか。　それとも
ツマリ　ソコノ　エトロフトカイク
つまり　そこの　択捉とかに行く。
19 彦野:ココワ　ムコーサイッテモ　ノ　ウチカ
ここは　向こうに行ってもね　家から
ラデテイッテモー　ケッキョク　キカン
出て行っても　結局　期間が
ガアルワケサ　ノ　ナンガツカラナンガ
あるわけさ　ね。何月から何月
ツマデ　ソノキカンダケノ　フネデハタ
まで　その期間だけね　船で働いて
ライテー　カエッテクレバ　マタココサ
帰ってくれば　またここに
クルノヨー　チョンド　ココノー　イマ
来るのよ。　丁度　ここの　今の
ノイカツリダトカ　イカツリダトカ
イカ釣りだとか　イカ釣りだとか
タラツリダトカ　ムカシ　ミンナ　ハエ
鱈釣りだとか　昔は　みんな　はえ
ナワデヤッタカラー　イマミタイニノー
縄でやったから　今みたいにねえ
アミナンテユーモンワ　ミタクタッテ
網なんていうものは　見たくたって
ノー　アレダカラノー
ねえ　あれだからねえ。
20 橋本:デカセギワ　ハコダテカラデタンデスカ
出稼ぎは　函館から出たんですか。
デカセギニイクトキニネ　ドカカラ
出稼ぎに行く時にね　どこから
シュッコーシタンデスカ
出航したんですか。
フネノッタンデスカ
船に乗ったんですか。
21 彦野:ナンダカンダッテノー　ココワ　ノー
何だかんだってねえ　ここは　ねえ
ベンリガワルクテ　ノ　トッテキタサカ
不便で　ね。獲って来た魚
ナデモー　クルマッテモノネーンダモノ
でも　車ってものがないんだもの。
ソノトージワ　マダノ　ドーロガネーン
その当時は　まだね　道路がないんだ
ダカラ　ダカラ　ゼンブフネキテー
から。　だから　全部船が来て
ハコダテカラーフネーヨンデ　ソイサー
函館から船を呼んで　それこそ
ナンボデモツンデー　ソレカラマター
いくら積んでも　それからまた
ハコダテノホーモッテイクノセ
函館の方に持って行くんですよ。

ここでは、1941（昭和 16）年頃の漁業の出稼ぎの様子が語られている。わずか 5 馬力の焼玉船を操って、択捉島や北千島まで、イカ釣り、鱈釣りに

出かける当時の漁師のたくましさが窺える。網を用いずにはえ縄漁が主流であったことも興味深い証言である。

３．２　定期船航路、加工の様子など (Track 56-79)

1 彦野:ソーユーオッキイカイシャガ[2)]　ホラ
そういう大きな会社が　ほら
ハコダテニアッタモンダカラ　ソコノ
函館にあったものだから　そこの
ソイコサ　シゴトウケオッテヤルウチヤ
それこさ　仕事を請け負ってやる家や
カイシャガ　ホレ　タノミニクルワケダ
会社が　ほれ　頼みに来るわけだ。
ナンニチカラナンニチマデッテ
何日から何日までって。

2 橋本:アレ　アノ　サハリン　カラフトトカイク
あれ　あの　サハリン、樺太とかに行く
トキワ　ハコダテカラニホンカイガワ
時は　函館から日本海側を
ヲトーッテ　イッタンデスカ　ソレトモ
通って　行ったんですか。それとも

3 彦野:ハコダテカラ　フネデイクンダ
函館から　船で行くんだ。

4 橋本;フネデ　ドッチヲトーッテ
船で　どっちを通って。

5 彦野:フネデ　ソイコサ　アイダー　イマノ
船で　それこさ　あれだあ　今の
クシロ
釧路。

6 橋本:クシロ
釧路。

7 彦野:ソレカラ　ネムロ
それから　根室。

8 橋本:アーアッチノホーネ　ネムロ
あああっちの方ね　根室。

9 彦野:ソイコサ　コーユーオッキーカイジョーノ
それこさ　こういう大きい海上の
ヨーシミテー　ソレカラコンド　ホラ
様子を見て　それから今度　ほら
クナシリサワタッテー
国後に渡って。

10 橋本:ワタッテー
渡って。

11 彦野:エトロフサーワタルンセー
択捉に渡るんですよ。

12 橋本:アーア
あーあ。

13 彦野:ダカラ　ノ　マダココニ　ソノコロ
だから　ね　まだここに　その頃
エトロフサイッターアノマゴダチ
択捉に行ったあの孫たちが
マダイルベ　シマムラッテノ
まだいるでしょ。島村っていうの。
イマノ　ホラ　コンブトリニデテイク
今の　ほら　昆布採りに出ていく
フネ　ソイコサー　ヤキダマノゴバリキ
船。　それこさあ　焼玉の 5 馬力
デ　ノ　アーユーノサチィケテ
で　ね。ああいうのを装備して
エトロフマデ　ドッコシタモノダッテー
択捉まで　引っ越したものだったんだ。

14 橋本:イヤ　ソレデ　エトロフマデイッタッテ
いや　それで　択捉まで行ったって。

15 彦野:イッシューカン　カカッテー
1 週間　かかって。

16 橋本:ソーリャスゴイデスネー
そうりゃすごいですねえ。

17 彦野:イッシューカンモ　ヨーカモカカッテー
1 週間も　8 日もかかって。
デ　ジブンデ　イマミタイニ　オメー
で　自分で　今みたいに　あなた
シートモナイシ　ムシロハッテ　ナニカ
シートもないし　ムシロを張って　何か
モラネーヨーニ　フネノココカラムシロ
漏らないように　船のここからムシロを
ハッテサー　イチニチバンマデハシッタ
張ってね。　1 日晩まで走ったって
ッテー　ドコマデハシラレル　ナンキロ
どこまで走れる。　何キロも
モハシラレネーベサ　フネノソク
走ることできないでしょ。船の速力が
リョクネーモンダモン　ダカラ　ソイデ
ないんだもん。　だから　それで
モネ　イッシューカングライカカッテ
もね　1 週間ぐらいかかって
アレバ　エトロフマデ　ナントカカント
いれば　択捉まで　何とかかんとか
カクルンダ
行けるんだ。

18 橋本:エトロフダト　カナリサカナトレルンデ
択捉だと　かなり魚が獲れるんです
スカ
か。

19 彦野:ムコーニィー　ムコーサシミツイタシト
向こうに　　向こうに住み着いた人が
タイシタイルンダモノ
たくさんいるんだもの。
20 橋本:アッ　ソノママネ
あっ　そのままね。
21 彦野:ソノママ　モドッテクルノ　アイダカラ
そのまま　戻って来るの　　面倒臭いか
ソイコサ　ホラ　テーキノ　ホラ
ら　それこさ　ほら　定期の　　ほら
イマデユー　テーキセンダワナ　イッカ
今でいう　　定期船だよね。　　1ヶ月
ゲツニイッペンカノ　ソレデ　ハコダテ
に一遍かね。　　それで　函館から
カラエトロフマデ
択捉まで。
22 橋本:アッタ　テーキセン
あった　定期船。
23 彦野:キタチシママデイクンダー　イクノワ
北千島まで行くんだ。　　行くのは
ノー　ダカラ　ホラ　ベットブトカ
ねえ。だから　ほら　ベットブとか
ホラ　アノ？　　シンデルドコサー
ほら　あの＜不明＞ 住んでいる所に
レンラクシテー　イツカライツソコマデ
連絡して　　いつからいつそこまで
イクッテ　ホラ　ソイコサ　ツィンデク
行くって。ほら　それこさ　積んでいく
モノワツィンデイカネーバナラネーシ
物は積んでいかなければならないし
クルモンワソコカラモラッテコネバナラ
来る物はそこからもらって来なければな
ネーシ　　ソーヤッテミンナ
ならないし　そうやってみんな
セーカツシタモノナンデスヨ
生活をしたものなんですよ。
24 橋本:ジャー　トドホッケカラモ　エトロフカ
じゃあ　椴法華からも　　択捉か
アッチー　　イマノホッポーリョード
あっちの方　今の北方領土には
ニワイッタンデスネ
行ったんですね。
25 彦野:ソーソー
そうそう。
26 橋本:スミツイテタヒトモイルシ
住み着いていた人もいるし。
27 彦野:オレタチワ　ホラ　デカセギダカラ　ノ
私たちは　　ほら　出稼ぎだから　ね。
ソイコサ　シガツニイクベサ
それこさ　4月にいくでしょ。
28 橋本:シガツニイク
4月に行く。
29 彦野:シガツニ　オラーハコダテノ　アイダー
4月に　　私は函館の　　あれだ
イマーネーベモンナ　キットナー
今はないだろうな　　きっとなあ。
ヤブレテマッテ　ツィブレテシマッタ
だめになって　　潰れてしまっただろう
モンナ　ソイコサ　ソコカラ　タノミニ
な。　　それこさ　そこから　頼みに
キテー　シガツカラロクガツイッペーイ
来て　　4月から6月いっぱいいるのさ。
ルノセ
30 橋本:アー　ナルホドネ
ああ　なるほどね。
31 彦野:シガツカラロクガツイッパイノ
4月から6月いっぱいね。
32 橋本:ナニトッテタンデスカ　　アッチデワ
何を獲っていたんですか　あっちでは。
33 彦野:タラ
鱈。
34 橋本:タラ
鱈。
35 彦野:ウン　ナーモ　ソイコサ　イレテー
うん　何でも　それこさ（海に）入れて
ソイコサ　タクワンノキノキレ
それこさ　沢庵のきれっぱしを
イッパシーナゲテモ　ツィレテアッタン
一発投げても　　釣れていたんだ
ダカラ　トージワ
から　　当時は。
36 橋本:アハハ　ホントニ
あはは　本当に。
37 彦野:ウソデネーンダ
嘘ではないんだ。
38 橋本:ヘエ
へえ。
39 彦野:イマミタイニ　ノー　エビデネバダメダ
今みたいに　　ねえ　海老でなければ
トカー　　ノー　ソイコサ　アレデ
だめだとか　ねえ　それこさ　あれで
ネーバダメダトカ　　ソーユージダイデ

なければだめだとか　そういう時代では
ネーンダ　トージワノ　ダカラ
ないんだ　当時はね。　だから
タクワンノシッポーカケテモノー
沢庵の尻尾を（針に）掛けてもねえ
タラツィレルグレーデアッタンダ
鱈が釣れるくらい（たくさん）いたんだ。
ソーヤッテ　ソイコサ　イチネンタラ
そうやって　それこさ　1 年鱈釣りに
ツィリニイッテー　ツィギノトシカラ
行って　　次の年から
ホラ　コンドワ　ソレ　コンダー
ほら　今度は　それ　　今度は
セイヒンニシーネーネバネーンダ
製品にしなければならないんだ。

40 橋本:**ソーネ**
そうね。

41 彦野:**ナマニシテ　　モッテコラレネーンダ**
生のままでは　持って来られないんだ
モン
もん。

42 橋本:**ソーネ　クサッチャウモンネ**
そうね　腐っちゃうもんね。

43 彦野:**セーヒンニシナキャナンネーカラ　ノ**
製品にしなきゃならないから　　ね。
シタカラノ　　ソーユーチカラノアル
それだからね　そういう力のある
コンドワー　ホラ　イチネン　コンドワ
今度は　　ほら　1 年　　今度は
イチネンノウチノ？　アタリイッテー
1 年のうちの＜不明＞　辺りに行って
イグカラネー　　ライネンカラーホンカ
行くからねえ。　来年から本格的に
クテキニ　アノー　コンナノ　シラベス
　　あのう　こんなの　調査をす
ルカラ　オキニカンケーナク　オキカラ
るから　沖に関係なく　　沖から
モッテキタモノヲカイトッテ
（獲って）持って来たものを買い取って
セーヒンニスルシゴトダー　コンド
製品にする仕事だ。　　今度
クワナイ　？　ショ　　？ ナンセ
食わない＜不明＞　でしょ。<不明>何せ
カイシャガノ　ホイデ　コンドワ　ホラ
会社がね。　　それで　今度は　　ほら
ツィクッタコトネーンダモノ　ナンボ
作ったことがないんだもの　　いくら
リョーシヤッタラッテー
漁師（の仕事）をやってたって。

44 橋本:**ソリャソーデスネ**
そりゃそうですね。

45 彦野:**クーンダラノ　　？　　ニクーテ**
ただ食うだけだったら＜不明＞に食べて。

46 橋本:**セーヒンニシナキャイケナイモンネー**
製品にしなきゃいけないもんねえ。

47 彦野:**カンタンダッテサー　　セーヒンニスル**
簡単だといってもねえ　製品にするって
ッテユーコトワ　コンドワウラネバナン
いうことは　　今度は売らなければな
ネーンダモノ　　ヘタナモノ
らないんだもの。　へたなものを
ヤッタッタッテ　ホラ
作ったって　　ほら
ツィクッタッテサ　カワネーベ　ダレモ
作ったってね　　買わないでしょ　誰
も。
トージナーンボデモアルンダカラ
当時はいくらでもあるんだから。
ダカラネ　ソレー　ハントシワー
だからね　それを　半年は
コンドワ　ソノ　ツィクルセンモンセ
今度は　　その　作る専門だよ。
ソレ　　ツィクルシト　ソイサ
それを　作る人。　　それだから
コースィガイラレテ　ノ
講師がいて　　ね。

48 橋本:**オシエテクレルノ**
教えてくれるの。

49 彦野:**マッ　アサカラバンマデヤ　ナンノコト**
まっ　朝から晩までだ。　　何のことは
ネー　ソレダケ
ない　それだけ。

50 橋本:**ソレワドコデ**
それはどこで。

51 彦野:**トージ　？　イタモンダ　　ウゴカネー**
当時＜不明＞いたもんです。移動しなけ
バネンダモン
ればならないんだもの。

52 橋本:**ソレワ　アノ　エトロフカクナシリニ**
それは　あの　択捉か国後に
コージョーガアッテ　ソコデヤルンデス
工場があって　　そこで（仕事を）

カ
やるんですか。
53 彦野:ソーソーソー
そうそうそう。
54 橋本:アノ　フネカラオリテ　カイサン
あの　船から降りて　　解散。
55 彦野:ソレデ　　コンド　ホラ　ツィクルヤ
それで　こんどは　ほら　作るのに
キレーニアラッテ　ノ　シオシテー
きれいに洗って　　ね　塩を振って
イツィニツィナライツィニツィ　フツカ
1 日なら 1 日　　2 日
ナラフツカ　ホイデー　コンドワ
なら 2 日。　それで　　今度は
マーダアラッテノー　コンドワ　ホラ
また洗ってねえ。　　今度は　　ほら
タケノシダレ　タケデデキタシダレサノ
竹の簾　　竹でできた簾にね
イツィマイズィツナラベテ　ホサネバ
1 枚ずつ並べて　　干さなけ
ナラネーベヤ　　イツィニツィデ
ればならないでしょ。1 日で
カワクワケデネーンダカラ　ナンボ
乾くわけではないのだから。いくら
テンキガイータッタッテ　オマエ
天気がいいといったって　あなた
イマミタイニ　カンソーキアルワケデ
今みたいに　　乾燥機があるわけでは
ネーベシ　　ノ　ゼンブテンビ
ないんだから　ね。全部天日
ボシサー
干しさあ。
56 橋本:テンビボシネー
天日干しねえ。
57 彦野:マイニチテンキイバ　ヨッカモアレバ
毎日天気がよければ　4 日もあれば
ソイコサ　ヒムクッテー　　ミダケトッ
それこさ　手でひんむいて　身だけ取っ
テー　クーダケカワクンダ　ゼンブ
て　　食べるだけ乾くんだ。全部
ホラ　ナカノホネナンモトルンダカラ
ほら　中の骨をみんな取るんだから
アタマモツィーテネーシ　セボネモゼン
頭も付いていないし　　背骨も全部
ブトッテシマーカラ　ノ　ダカラ
取ってしまうから　　ね。だから
テンキツヅケスレバ　ヨッカモアレバ
よい天気が続けば　　4 日もあれば
ホレ　タベルグレーノ　　アレニナルノ
ほれ　食べるぐらいはね　あれになるん
セ
ですよ（仕上がるんですよ）。
58 橋本:ウンウン　ナルホドネ
うんうん　なるほどね。
59 彦野:ハテ　ソレデ　シガツカラロクガツ
さて　それで　4 月から 6 月
イッペーマデイテ　イツモダラカエル
いっぱいまでいて　いつもなら帰るの
ンダケド　ソーユーシゴトダモン
だけど　　そういう仕事だもん。
ダカラ　コンドワ　ホラ　カンゼンニ
だから　今度は　　ほら　完全に（仕事
オボエテシマワネート　　ノ　ライネン
を）覚えてしまわないと　ね　来年
キタシトニ　オシエネバネーンダモン
来る人に　　教えなければならないんだ
もの。
60 橋本:ソーダヨネー
そうだよねえ。
61 彦野:ダカラ　シチガツイッペーイデ　シガツ
だから　7 月いっぱいいて　　4 月
カライッテ　シチガツイッペーイデ
から行って　7 月いっぱいいて
サンジューゴエンダデ
35 円だったよ。
62 橋本:ヒトツキデ　ゼンブデ
1 月で。　　全部で。
63 彦野:ヒトリデ
一人で。
64 橋本:ヒトリデサンジューゴエン
一人で 35 円。
65 彦野:サンジューゴエン
35 円。
66 橋本:ウン　カセゲル
うん　稼げる。
67 彦野:ソイデモ　トージノサンジューゴエン
それでも　当時の 35 円
ダカラ　ノ　ジューエンアレバ　コメ
だから　ね。10 円あれば　　米を
カッテー　ミソカッテー　ノ　ショーユ
買って　　味噌を買って　ね　醤油を
カッテ　セーカツデキルンダヨ

買って　生活ができるんだよ。
ジューエンアレバ
10 円あれば。
68 橋本:**ジューエンアレバネ　タイキンデスヨネ**
10 円あればね。　　大金ですよね。
69 彦野:**ソーソー　サンジューゴエンモラウーテ**
そうそう　35 円貰うっていうのは
タイキンナンダワ
大金なんですよ。
70 橋本:**ジャ　イッカイノデカセギデ**
じゃ　1 回の出稼ぎで
サンジューゴエン
35 円。
71 彦野:**ソーソー　ソレデ　コンドヤッテ**
そうそう　それで今度（仕事を）やって
ツィギノトシカラ　コンドワ　ホラ
次の年から　　こんどは　ほら
キセンデ　ホラ　テーキセンミタイニ
汽船で　　ほら　定期船みたいに
イクフネデ　ノ　コンダ　オラノ
行く船で　　ね　今度は　私の
ダチノセテ　　？　サンジューニン
仲間を乗せて　＜不明＞　30 人
グライマデ　イタベヨナ
ぐらいまで　いたでしょうね。
72 島田:**ヤッパリ　ヒラキニ**
やっぱり（魚の）開き（用）に。
73 彦野:**ソー　ツクルノニ　ノ　アトー**
そう　作るのに　ね。　あと
ソイコサー　ソイコサー　オモイモノ
それこさあ　それこさあ　重い物を
タナガネバネンネーカラ　　ノ
持ち上げなければならないから　ね。
ダカラ　ナンボアッタモンダガノ　アレ
だから　どのくらいいたものかね　あれ。
ダカラ　ワガイシュー　ジューニン
だから　若い者が　　10 人
グライ　ナンボカナンダカンダデ
ぐらい　合計すると
ゴジューニングライイタケンドナ
50 人ぐらいいましたけれどね。
74 橋本:**アー　ナルホドネ**
ああ　なるほどね。
75 彦野:**ソレイレテ　　デモヤッパリ　オレガー**
それを入れて　でもやっぱり　私が
ヤメルマデー　ロクネングライ
やめるまで　　6 年ぐらい
ヤッタモンナ
（出稼ぎを）やりましたものね。

上記の談話では、1941（昭和 16）年前後の出稼ぎの様子が、函館を拠点とする会社の斡旋によって実施されていたことが語られている。当時、函館、釧路、根室、国後、択捉、北千島に至る航路が確立されていて、定期船が航行し、出稼ぎ者を運んでいた。また、現在の北方領土域内には定住する人たちもいて、漁獲された魚の加工に従事していた。この仕事には、出稼ぎの人たちも関わっていたようで、加工の方法が詳細に説明されている。

4　結び

被調査者として協力いただいた彦野勇氏は、漁師の視点から、現場に精通した人ならではの、臨場感のある、貴重な証言をしてくださった。ただ残念ながら、数年前に他界されたため、本稿で掲載された部分を含む 2006 年の記録が、彦野氏の談話のすべてである。

証言内容を実証するために、今後、文献資料や地元の協力者を介しての確認作業をする必要がある。また、音源を何度聞いても把握のできなかった箇所があるので、地元の方言話者に再度聞き取り調査をしなければならない。

この記録を第 1 次資料として、すでに忘れ去られた漁業関連の事物や用語を掘り起し、さらに渡島東岸部を中心とした方言語彙の意味・音・用法を編集して提示していく予定である。

謝辞

この調査に協力して下さった故彦野勇氏、また、氏を紹介し、色々な話題をも提供して下さった玉村栄吾氏に心からのお礼を申し上げたい。音声の仮名起こしの際に、渡島半島内陸部の方言話者として辛抱強く助言をして下さった室蘭工業大学名誉教授寺田昭夫氏にも、こころからの感謝を申し上げたい。もちろん、誤り等はすべて著者に帰するものである。

注

1): 以下、 意味が不明である場合には、標準日本語記述の行に＜不明＞と記す。

2): 直前の談話で、ニチロとニッスイが言及されている。

文献

(1) 島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩谷亨. (2001) 「椴法華（とどほっけ）における言語と風習―失われゆく伝統」、『室蘭工業大学紀要』第 51 号、173-182.

(2) 椴法華村教育委員会編. (2000) 『椴法華弁』、椴法華村教育委員会

(3) 橋本邦彦. (2011) 「椴法華の方言語彙について」、『北海道言語文化研究』第 9 号、115-124.

(4) 類家直人（編）. (2007) 『復刻版松前古老百話・白神』、松前古老百話・白神復刻実行委員会